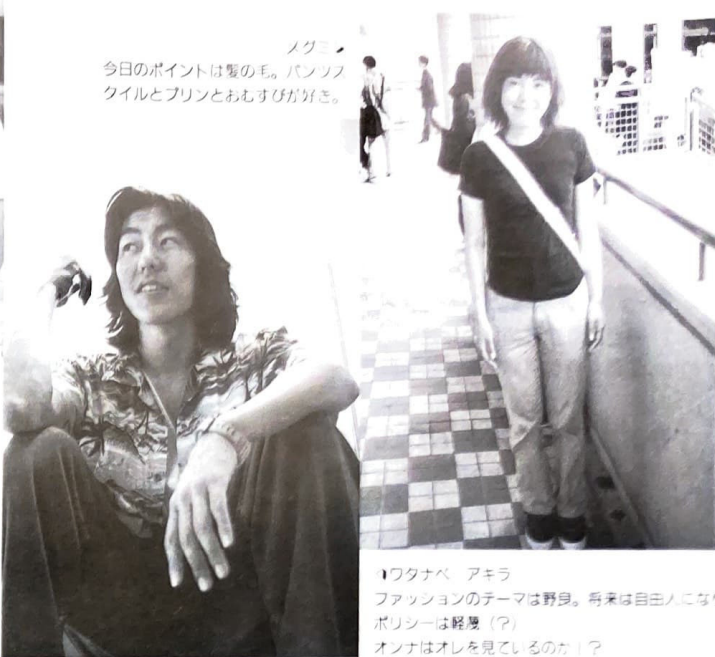
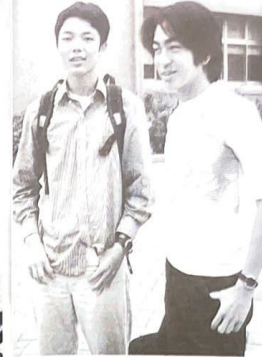


Impressions

総科究 Street Fashion

「自分」と自分の「好き」がわかるといいこと、主張がはっきりできること、それが自分のスタイルを持つということ。同じ服を着てもなぜかどこか違うのほ
 そういうこと。お手本はいつも、鏡の中の自分だから。

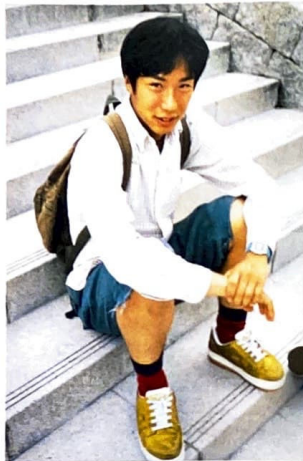


メグミ
 今日のポイントは髪の毛。パンツ、
 タイルとプリンとおむすびが好き。

ミヤタケ
 ミヤタケボール
 映画が好きです。将来は建築家
 になりたい。今日はから揚げを
 食べた。(ボール)
 バスケットはまってる。今日は普
 段着。うかつだった。
 (ミヤタケ)

ワタナベ アキラ
 ファッションのテーマは野見。将来は自由人になりたい。
 ポリシーは軽蔑(?)
 オナナはオレを見ているのか!?

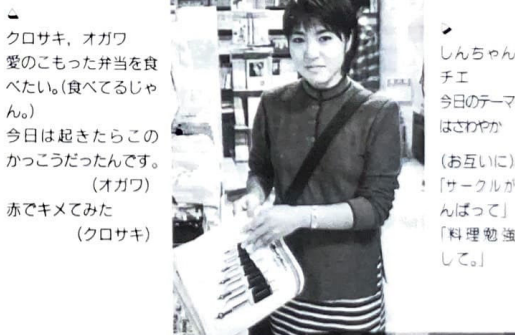
カズナリ ミキ
 将来は院に残って勉強したい。
 彼女はネコっぽい(カズナリ)
 科学捜査研究所に入りたい。
 彼は子犬っぽいカナ。(ミキ)



カツラ
 ファッションのテーマは
 手づくり(スポン)
 サッカーが好きです。
 「俺のシャベリは面白い」



マナくん
 今日は「イカ
 干煎」で帰るカ
 コフ。
 家にはおまをうけ
 ません。



クロサキ, オガワ
 愛のこもった弁当を食
 べたい。(食べてるじゃ
 ん。)
 今日のは起きたらこの
 かつこうだったんです。
 (オガワ)
 赤でキメてみた
 (クロサキ)

しんちゃん,
 チエ
 今日のテーマ
 はさわやか
 (お互いに)
 「サークルが
 んばって」
 「料理勉強
 して。」



カナエム
 青色の服にはまっています。
 140cm台の女の子募集。いっしょに
 1-4同窓つくりましょう。



マッチ, ジェフ, アユコ
 保奈おまの髪形にしてきたとこ(マッチ)
 普通のアメリカ人の大学生(ジェフ)
 日本人の大学生(アユコ)

カオリ, ヤヨイ
 えーどうしよう。今は友達に似顔絵にはまってる。(ヤヨイ)
 ミシンで服を作ろうと思っています。(カオリ)



エリコ
 将来の夢は花屋さ
 ん。
 ファッションはシン
 プルなのが好き。



もくじ 目次

◆巻頭言「ヒトから人間へ」

—自由な空間の持つ意味—
生和 秀敏 (総合科学部学部長)

◆オリキャン Report '97

～キャンブにまつわるエトセトラ～
・基調報告
・参加者の声
・09が斬る!
～「よかった神話」にも申す
・作るということ
「スタッフのオリエンテーション」になれるのか

◆「講義をしながら思うこと」

奈良 重敏 (数理情報科学コース 教授)

◆総科との縁 総科OBの縁 ～卒業生からの声～

桑島 道夫 (静岡大学人文学部講師)

◆『総合科学部に行ったら良かった?』

・アンケートに見る卒業生850人の生活と意見

◆エッセイ

・一人探検隊 三輪 誠一郎
・どうせこの世はそんなとこ
第三話 柏戸 義道
・総合科学部を想う 梶藤 耕平
・最近の私の読書傾向 足立 匡義
・町は生きている 西村 雄郎

◆読者からの声

◆編集後記

◆飛翔伝言板

◆JからMへ

学部生研究室のこれから
・引越報告
・学生座談会
・たまり場と総合科学

◆研究室紹介

・李研究室 (社会科学コース)
・小島=ルー研究室 (外国語コース)
・岩永研究室 (生体行動科学コース)
・日下部研究室 (自然環境研究コース)

◆卒論紹介

◆新任教官紹介

◆人事異動

クラブ1
"Impressions
総科発・ストリート
ファッション"
クラブ2
"手"

ヒトから人間へ

—自由な空間の持つ意味—

生和 秀敏 (総合科学部学部長)



感できる必要がある。

かつて、外国の大学事情に精通した方から「ヨーロッパの大学が、大学の施設として最も重要と考えている施設は何だと思ふか」と問われたことがある。大学のスタートがアグラ(広場)にあったことを失念していた私は、しばらく考えて「教会でしょう」と答えた。勿論不正解。正解は「ファカルティ・クラブ(教職員が自由に話し合う場)」であった。「研究室より教室より図書館より、自由な仲間と自由な時間を過ごすことのできる空間を持っていることが、大学としての格式の高さを示すものだ」という話に改めて驚いたことを覚えている。

いうまでもないことだが、学生研究室を特定の学生の薄汚い「たまり場」と同一視されては困る。多くの学生が集まり、時には教官も顔をのぞかせることのできる場としなければ、身も蓋もない。どうすれば現在の学生研究室を「アグラ」と呼ぶにふさわしい場にすることができるか、この機会に論議してほしい。そのことの中で、ヒトが人間になることの意味を考えることができれば幸いである。

人間を「間柄的存在」といったのは確か和辻哲郎であったと思う。あるいは、人間という言葉が創られたころから、人間は「ヒトとヒトの間に生きる存在」と考えられていたのかもしれない。しかし、次第に人間という言葉のもつ意味が変質し、「間」の部分が抜け落ちてきたように思える。そうでなければ、「ヒトとヒトの間柄の関係」という重層的内容をわざわざ表す「人間関係」という言葉が一般化されるはずがない。

人間関係と言う言葉が頻繁に使われるようになったのは、近代化が急速に進んできた60年代からである。都市化・核家族化・機械化などにより、ヒトとヒトの絆は弱くなり、その反対に、個性化重視の社会的風潮と他者に依存しなくても生きられるという幻想が支配的になってきた。個性化への指向性は、他者との共有部分をひたすらそぎ落とし、他者との関係を煩わしいものと見なす傾向を加速した。この傾向は、大人たちだけに留まらず、確実に子供たちの生活を自己中心的で内閉的なものへと大きく変化させてきている。ヒトが人間になるためには、もう一度、人間が切り離された個的存在なのではなく、紛れもなく「間柄的存在」であることを生活の中で実

※『総合科学部に行ったら良かった?』は総合科学部自己点検・評価委員会にアンケート結果のダイジェスト版を寄せていただいたものです。

JからMへ

～学部生研究室のこれから～

総合科学部学部生研究室（通称J）が今年3月、西講義棟（J棟）から事務棟（M棟）1階に引っ越した。広島大学に総科が誕生して間もない頃からあったという学部生研究室だが、当時と今ではその姿や意義は大きく異なり、現在の学部生研究室に関しては必要ないとの意見すらあがっている。こうした学部生研究室に関する様々な意見を拾い上げ、今、学部生研究室に求められているものを考えていきたいと思う。

学部生研究室とは
 学部が用意した学生のための研究室及び控え室。
 現在は1年生が主に使用しており、いわゆる”たまり場”として使われていたり、各種行事のための話し合いの場として利用されたりしている。

◇実際に昔の学部生研究室の様子をご存知の、総科3期卒業生の教官の方に当時の思い出を書いていただきました。◇

総合科学部一年生研究室の思い出

坂田 省吾
 （生体行動科学コース 助教授）

当時の学部生研究室は半地下と呼ばれた講義室の並びの端、大講義室の裏にあった。窓には鉄格子が入り、薄暗くて汚い部屋だった。しかし、部屋の汚さや薄暗さよりも、活気と人の明るさがあった。妙になつかしい部屋である。休憩時間になると人が集まってきた。さぼり学生も研究室で好きかってなことをしていた。
 ある時突然、今堀誠二学部長が乱入してきたことがあった。それは学生との対話というよりも、今堀先生が一方向的にしゃべって帰ら

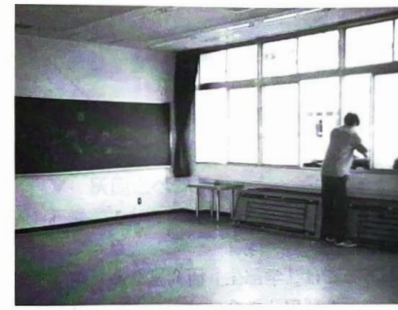
れた印象がある。聞いていた学生は呆気にとられると共にこの学部の強烈なエネルギーを感じた。自分たちで自己紹介の文集を作ろうというときにはその相談の中心的な場になった。大学祭で演劇をやろうとうときにはその出し物を考える場所になった。個人で電話を持っている人も少なく、連絡をとるためには必須の場所だった友達を介して別の友達に連絡することを日常的にやっていた。人の温もりのある古き良き時代であった。



▲前世代の遺物を発見



▲引っ越し日曜日。本当に春らしい1日でした。



▲背中



▲引っ越し当日のM



翌日のM▶

融合と友情と愛情と

— 半地下学生研究室のここと —

大山 茂之
 （外国語コース 助教授）

総科の金看板の一つに「文・理の学問の融合」というのがある。でもその前に、興味も関心も多様な学生が、まず総科生としての一体感を持つことが切実な問題だ。そのために、学生研究室も何かの役割を果たしていたのかもしれない。約120人の3期生が集う学生研究室は、東千田の自然科学棟にあった半地下の汚い部屋だった。当時の今堀学部長がいきなり訪ねてこられて一同たまげた事もあった。何人が常連であったかは定かではない。し

かし総科という変なところに来た者どうしが語り合う中で、いろいろなつながりが出来ていった。「鬱勃たるパトスの会」では、夜中の広島城公園で管を巻き人生を語り合った。また、西武ライオンズ後援会はこっそりとタブチ君を応援していた。
 思うに、学問の融合などとても無理であったが友情はここで確かに育まれたし、ときにはそれが愛情へと発展していったこともあった。だよね坂田君。

学生座談会

1997/6/14開催



◀東千田時代の学部生研究室

写真は西条キャンパスへの
移転前に行われた
「さようなら研Q室」のパーティーの様。
この部屋も校舎ごと取り壊されてしまった。

▶西条キャンパスの 旧学部生研究室

通りに面した窓と2つの
扉を持つ最も開放的な研究
室。

LL設備拡張の関係から今
回の移転となった。



▲現在の学部生研究室

窓の外には壁がある。
陽のあたる時間は
短い。



▼楽園追放

石橋：あそこは「学部生」研究室なんだから
2年生も利用していいはずなんだけれど
何で利用しないのかな。

福島：移った事を知らない人も結構いると思
うよ。しかも周りに一年生がいっぱい
で遊んだりなんかしていると学部生研究
室らしくないし、入りづらい。

元吉：いつのまにか一年生に明け渡すものだ
というのが伝わってきたというのもある
と思う。もう行く価値がなくなったつ
いてのものもあるかもしれないけど。

田村：じゃあ、今の08の人にとってたまり場
みたいな物は有るんですか。

元吉：俺は一人でいることが多いから。

安達：それなんよ。2年になってからは、授
業が終わって昼休みになっても、飯いっ
つも一緒に食ってた奴が居ない。それ
でもM棟の前のベンチの所に行くと誰か
いるわけよ。俺にとってJって暇なとき
に誰かを見つける場所なんよ。それが
なくなった事で俺も戸惑ったし、周りの奴
もそう言っていた。結局、今の2年生は事
務棟あたりの草っぱとかにいたりする。

▼「一部の人間しか利用していない」、「総科生が外に出ていくのを妨げ
ている」等、旧J教室に対する風あたりは普段から強かった。

一体、何がそのような問題を生み出していたのか、また、そもそもそのような
指摘は正しかったのか。これらの疑問を足がかりに、これからのMの役割について話
し合ってみた。

▼ 広大生哀歌

石橋：そういえば、スペイン広場もたまり場
には違いないけれど、あそこは総科生が
少ないよね。

元吉：うん、不思議と少ない。他学部にも圧倒
されているよね(笑)。総科生が入りに
くい雰囲気があるというか。

田村：でもたまり場といっても、スペイン広
場にきている人って、みんなが仲いいわ
けじゃないですよ。まあ、お日様にあ
たりながら御飯食べるのはいいことで
よ。

石橋：でもゴミは片づけて欲しいね。情けな
いことにはのぼりが立った。あのぐら
いのことはしっかりして欲しい。(註)

元吉：あんなの駅でもないよ。

田村：多少でも良くなっただけいいですよ。

元吉：ていうか、あそこまでしないとできな
い広大生が悲しいよな。あそのマクド
ナルドの前にしても駐輪禁止、って書い
て初めてなくなった現状ね。

宮原：私まだとめてる。(笑)

元吉：俺、そういう根性が好き(笑)

安達：でも、今年はひどいよね。去年もやっ
とったけど、あそこまでは…

福島：健康管理センターの前までは…

田村：蹴りたいですよ、あの自転車。邪魔だ
もん。

安達：みんなが通る食堂の入り口までとめて
ある。

小林：去年ととめ方が違うよね。

安達：去年もとめてたけど、数が3倍ぐら
いに増える。

田村：少なかったんですか？

安達：うん

田村：ちゃんと人が通れたんですか？

▼ 灰皿とベンチ

石橋：でもあそこにいる人間も限られている
よね。

元吉：うん。

田村：09にとって有名な人達が多いです。オ
リキャンとかで。

安達：だから入りにくいのかな。話に聞いた
けど、07(3年生)の人で事務棟に入れ
なくて、入るのに大回りして行ったつ
て。知っている人がたくさん居れば入れるけ
れど、そうでない人にとっては入りづら
いんだろうね。

田村：知っているも入りづらい時もありますよ。

元吉：あそこは奥にあって場所が悪いから、
どうしても外に出てしまうよね。それ
で玄関の所にたまるんだろうけれど、態
度はしっかりして欲しい。

石橋：せめてベンチでも置くとかね。

元吉：灰皿を置くとそこに喫煙者が集まる
みたい、ベンチを置けばそこに人が集
まるようになるとおもうね。

石橋：灰皿はいいと思うよ。事務官とかが時々
学生と一緒に吸っているよね。それで話
聞いてみたりすると、今まで学生が遠か
つたけれどそういうところでつながりが持
ててよかったなあ。

(註) スペイン広場に一時「ゴミを捨てないで下さい」といった内
容ののぼりが立った。

元吉：通れた、通れた。

石橋：駐輪場は足りてるよね。

安達：足りてる。でも、駐輪場の方も最近置き方悪いよね。

福島：あそこに屋根を付けてくれるといいんだけどね。少しはきれいになるのに。



▼ M改造計画

石橋：話がそれてきたんで元に戻すけれど、M改造計画、Mをどう変えるべきかについてなにか意見があったら。

元吉：やっぱりもう少し総科に関する資料とかが欲しいね。コース毎の専門書とまではいかないまでも、みんなが持ち寄った文庫でも置いて、まずは本棚を作って資料の充実とか。後、もう少し清潔な空間にしようとか。

安達：でも今、なんかやっているらしいよ。水曜日に掃除しているらしい。

元吉：もちろん、資料の設備とかといったハードの面も重要だけれど、そういう毎週掃除をしていこうという芽を大切にしていきたいと思うのよ。いくら資料が整っていたって、要するに行く人の有効に活用しようっていう意志にやっぱり…

田村：でもハードが有れば、結構意志も生まれてくると思います。

元吉：ある程度はね、でも限界があると。

田村：学部側から、ちょっとした研究室位の量の本とかを用意してもらって、その横でもちょっとした貸し出しなんかが出来て、それで印刷も出来たりしたらもっと面白い場所になるのではと思いました。

▼ ラーメン

石橋：JからMに移るとき、教官の方から何か必要な物はないか、という話が来たよね。その時にそういう物の要求はでなかったの。

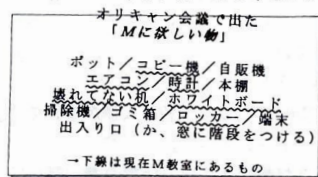
元吉：ある程度予算を出すから、何か必要な物はないかと言われたんで掛け合ってみて、後はオリキャンの会議でどういう物が欲しいかと聞いてみたんだけど。出てくる物は皆同じで、本棚とか、あるいは端末とか欲しいっていったし、後はポットとかね。ラーメン食いたいらしくてね。(註)

宮原：冷房とか。

元吉：発想は貧弱だった。その程度じゃないかなとおもうね。

石橋：学部から与えるしかないかな。学生が自発的に集めたり学部で要求していったりとか、そういうのは期待できないかな。

元吉：少しでもそういう物が必要だって思う人が動いていくしかないんじゃないかな。



▼ 元吉の苦悩

元吉：総科っていうのは本当に特色のある学部だと思うんだけど、オリキャンのシンポジウムなんかに参加してみた結論は、「総合科学部はまだできていない」ってことなんよ。

それを作っていくのはやっぱり専門しか勉強していない教授ではなくて学生だと思う。学生が「総科をどうやって作って行こう」って考えていかないと総科は今、本当に危機だと思うんよ。で、そういうことを考える場所がどこにあるかっていうと、やっぱりMしかないんよ。

それに2年生になるとコースに分かれて専門の方に目が向いてしまうから、そういうことは1年生が中心になってどんどん考えていって欲しいし、そういう意味でもMの意味は大きいかなと。

宮原：総科ってどんなところが特殊な学部？

(註) 端末：学内 LAN の端末の事

元吉：要するに文学部は文学の、理学部は理系の専門の勉強にしばらくはとると思うけど、総科はやっぱり周りを見る目を養えるところだと思うんよ。自分の専門は持つべきだと思うけど、何か問題にぶつかった時に、周りの意見を取り入れてみようという姿勢が総科の特色だと思う。

宮原：周りを見る目っていうのは学問の時に、他の学問分野を見るってこと？

元吉：そうだね、他の面からその問題に対してアプローチしている人に対して目を開く。

石橋：迷う、っていうのも特色だと思う。方向を定めるときに、迷っているから周りが見えるんよ。「迷う学部」？ お互い迷ってる人同士で話しができれば、そこからなんか出てくるんじゃないか。それが一番の意義じゃないかな。

総合科学が既存の学問じゃないことは確かに危機感を持つべきかもしれないけど、それは悪いことばかりではないと思う。

元吉：僕が危機感と言ったのは、発展というか、追求していったくない部分なんよ。

教官なら、教授会なんかでそれなりに意見を言う場があると思うけど、学生はなにも生産していないじゃん、今。総科というのはすごく魅力のある学部だけど、問題意識を持たないとどうしようもないところだから、せめてMはそういう事を考える場であって欲しいんよ。

▼ 無題

安達：それはそうだけれど、それをMに期待するのは違う気がする。あそこは人の出入りが多いし、そういうのは気心のしれた人同士の方が話し易いと思うし。

元吉：そこで止まってしまうのが危ないと思うんよ。Mを利用している人たちが少しでも「どうして自分達だけしか使ってないんだろう」と考えれば… 例えばみんなが参加できるような企画を何か一つやってみようとか、本当にささいなことから変わっていくと思うんだけどね。

宮原：でも総科も大学もみんなのものだよ。自分達ができなかったけえ、「これがいいんじゃないの?」っていうのはどうかな。

例えば、今の一年生がみんなで判断して、やっぱり一部の人が使ってもいいという結果になるかも知れんし、ならんかも知れん。議論したい人としなくてもいい人の間で、意思が全然伝わってなくて。お互いの考えている世界が全てだと思っちゃいけないから、難しいよね。



(ゆかた祭りの出店の話し合い)

元吉：うん。だけれど、あそこは「学部生研究室」だから、一年生だけの問題でもないよね。名前にこだわるようだけれど。やっぱり、ああいう部屋の使われ方一つでも総科の未来に係わってくると思うんよ。だから、学部生全員に責任があるんじゃないかな。

石橋：極端な話、2年生が大挙して押しかけて、「これから総科について考えます」っておち上げる手もあるよね(笑)、誰かに任せとおかないで。学部もMもみんなのものだから、変えていこうって動きは誰にでもできる。ただ変えていこうって意識を持っているのは一部の人間でしかない。Mによくいる人の中からそんな声が出てくる保証はないけど、結局、誰がMを変えていくのかな。

元吉：これは一人一人の気持ちによってる部分大きいから…

安達：何かを考えたりしたりするっていうのは、自分が問題意識を感じて、そこから始まっていくものだから、俺達が何かを授けようとする必要もないんじゃないの?あそこでたむろしていても、その中で何かを感じる奴が出てくれば動いてくれるんじゃないかな。誰でもある程度は考えていると思うよ。

Mをそんな場にしようとするより、そういう事を議論しようとする気持ちの

方が大切だと思うし。

元吉：その気持ちはどうやって引き出すの？
安達：問題に直面させることしかないと思うよ。俺は。

田村：気持ちを持つのと言葉にするのは全然違いますよ。実際に他の人に話したりしようとする、絶対に言葉の制限がついて、本当に難しいですよ。ですから、Mをそういう場にしたいと思います。

▼ 外に出るシンドローム

元吉：Jがあることで総科生が外に出ていきかけが潰れているって意見もあるけど、Jに来ない人から見てそういう意見はどう思う？

宮原：Jがあるからそうだとはいえないけど。それと、さっき総科が特殊だって話聞いてて思ったけど、確かに総科は特殊だけど、それはどの学部も同じだと思う。学問的に特殊というのはわかるけど、そこに変な人が多いというのはどこの学部でも同じだと思うよ。みんな総科ということにこだわり過ぎて。それが、Jの為かどうかは分からないけど。

元吉：外に出ていくのが総科の全てではないと思う。ただそれだけの事じゃないと思うし。うまく考えがまとまらないけど…

石橋：外にでていく時に総科を背負って出ていく事はないと？

元吉：いや、だから、外に出ていくイデオロギーっていうか、そのことが総科のただひとつの姿ではないということ。なんかみんな「外に出てけ」って焦りすぎて。ただ本当にそれが総科なのか、総科の全てなのかというのは疑い深いところがある。

宮原：外に出てけばいいというものでもないよね。



元吉：と思うんよ。

宮原：出なかったらいいという物でもないけど。大学生は批判心が旺盛だから、自分がしていることが間違っているんじゃないかって常に思ってて、だから、外に出ない人から外に出た方がいいという意見が出る。外に出ている人は実は出ない方が良かったと思っているかも。(笑)

元吉：それで、Jにいる人に内閉的だって批判があったわけだけど、実際にその場所を利用して人にしてみれば、自分なりの価値観があつてそこにいるんでしょ。それを批判するのはズレていると思う。それなりの言い分はあると思うよ。意義はあるわけでしょう、それを強要するように外に出ていけっていうのは、ちょっとおかしいんじゃないかな。

石橋：外っていうのは内があるのが前提だね。

元吉：そうそう
石橋：なんのベースもなく、総科も文学部も同じって考えるなら、別に外に出るって言い方をする必要はないよね。なんだかんだ言って、みんな総科をベースに時々外に出るっていうのを理想にしているんじゃないかな。

じゃあ、「内側」である総科って何なのかっていうことになると、そういう事に関する議論の場がない。自分が総科だっていう主張がまずない。でも、とにかく外に出ようって。

元吉：要するに土台がない。総科を足がかりにして外に出ていくって発想がなくて、なんか空中をさまよって足場がないところを踏んでいくような。そういう意味でMを活動拠点として利用できれば外に出ていくって概念もはっきりすると思うし、総科の事も考えられると思う。ただ外に出て行けっていうのは危ない。



▼ 総科の自主性

福島：私は総科の人は何でもできるっていわれていい気になっているっていうか、勝手に思いこんでいると思う。総科生なら英語ができて当たり前だとか。

総科っていうのは本当にいろんなものがあるってそれをうまく掴んで利用するものなのに、みんなその辺で自主性に欠けてると思います。

宮原：学問をしたくて来てるっていうのが本当の大学だね、親に授業料払ってもらってるわけだから。でも、そうじゃない人もいる。大学は入試受かって授業料払えば誰でもこれるところだから。

求めるものは人それぞれだから、学問をしたい人は自分でしないとイケん。

小林：確かに総科が一番自主性が重要だと思う。総科は何かって話が出たけど、やっぱり「総科というのはこういう学部だよ」ってみんなが同じように出せる答えはないと思う。言ってしまうと、みんながやっていることがそれぞれ違った総科の姿だから。

だけど、バラバラだからこそ、どこかでまとまりをつける必要があると思う。卒業した後も自分の好きなことをやっていいのならそれでいいだろうけど、ほとんどの人が企業のような社会の一単位の中に入って行くわけだから、そういうまとまりの中でやりたい事ややっていくことを学ばないとイケない。

▼ 鏡像を読む

石橋：最後になにか話しておきたい事はないですか？

▼ ほやし

総科の構成員の間にはMに対する無関心が当たり前のようにある。だが一方で、多くの人間が、問われればMが閉鎖的であるとして非難するのである。

閉鎖的であるというならば、非難する当人が真っ先に学部生研究室の住人になればよい。それで事態は改善されるだろうが、皆それをしない。しない理由をMの閉鎖性に求める。総科の無関心がMの閉鎖性を黙認し、その黙認によって助長された閉鎖性がさらに無関心を呼ぶ。「あれに何を言ってもしかたない」わけである。

そのくせMの現状に文句をつけようとするから、表面的に考えればMの住人に文句を言い、深く突っ込めば問題が総科全体に拡散して処置無しとなる。いい加減、御託や責任転嫁は聞ききた。

元吉：そうだね。僕が言いたいのは学生の控え室っていうのは、いつでも総科の学生を映すいい鏡だったと思うんよ。どんなに年によって偏りがあっても、控え室を見ればその年の学生の様子が大体見えるというか。

例えば、こうやって問題が見えてくるのは、実際にああいう控え室があるからだと思うんよ。こういうものはなくすんじゃないくて、どんな最悪な使われ方をされていても残していく。というのは、そこに姿が映し出されるとか、考えるきっかけになってくると思うからね。そういう意味で存在して行くべきだと僕は思う。

石橋：教官の方にももう少し覗いてもらいたいね。

元吉：そう。本当にそう。昨日、教官の方に話に行ったんだけど、「こういう問題があがっているんですよ」って言ったら「ああ、そーなのぉ」って言われて(笑)。のんきだなあと思って。

安達：教官ももっと使えろと思うんだけどね。「例えばコース説明します」って行ってあそこに張り出したら一番速いし。



《 たまり場と総合科学 》

～革命はカフェハウスから始まった～

カフェ・デ・フォアの前で民衆蜂起
を叫ぶカミュ・デ・ムーラン



→カフェはそのまま通りとつながっていた。

翌日、クールフェーラックはユリウスをミュージザン珈琲店に導いた。それから彼は、微笑を浮かべてユリウスの耳にささやいた。「僕は君を革命に巻き込んでやらなきゃならない。」

— 「レ・ミゼラブル」
ヴィクトル・ユーゴー

である。カフェがなければフランス革命も別の経過を辿ったであろうとまで言われるほど、このたまり場の役割は大きかった。また、カフェは思想的傾向や職業を同じくする人が、相互に性格や個人的特性を知り合う場でもあり、ここから様々な文学的、芸術的潮流が生み出されていった。

◆「裸の付き合い」が生んだもの◆

カフェがこの様な役割を果たし得たのは何故か。もちろん、そこで世論が形成される程、活発な議論が行われたのが直接の原因だろうが、果たして何がそのような議論を生み出したのだろうか。

一つには、ただ単に多くの人が集まっていたことがあるだろう。そもそも人がいなければ議論のしようなどないのだから。

もう一つにはその場にいる人間の間で、ある種の連帯感が共有されていることもある。

例えば、古今も東西も大きく異なるが、日本の銭湯もある種のたまり場には違いない。

橋本(1992)によれば、銭湯はコミュニティ

カフェハウスはコーヒーの浸透と共に、ヨーロッパ社会に取り入れられ、文化的・歴史的に非常に重要な位置を占めた。

専制主義から民主主義への移行期であるフランス革命期、カフェには様々な階層の人々が集まっていた。

まだ市民の間に浸透していなかった議会や新聞に代わって、ここで世論が形成されたの

の核的な位置に立地し、その付き合いの場、生活情報の交換の場という機能を果たしてきた。しかし、この場が時には選挙戦の根回しの場にさえなり得るのは単に立地の良さ、会う機会の多さよりも「裸の付き合い」という言葉に表されるような連帯感に負うところが大きいだろう。

先ほども述べたように、カフェには様々な階層からの人間が集まっていた。それらは普段、互いに話そうとはしない人々である。当時、独特の雰囲気を持っていたカフェといういわば異空間を共有することから起こる議論。それがフランス革命の裏舞台にはあった。

◆提灯と革命と◆

それでは人が集まれば、集まって連帯感を持って革命は起こるのか？ それだけではないだろう。もしそうならば、赤ちょうちんから起こった革命で、社会はとっくに崩壊しているはずである。

また家庭も連帯感の強い場であるが、リラックスしているために議論は起こりにくい。本

来、議論には集中を要するので、酒場の方が異常なのだろう。

ただ連帯感があるだけでは議論は起こらない。少なくとも生産的なものにはならない。そこには同時に、ある種の緊張感が要求されるのではないか。

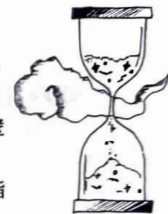
◆道に面した空間◆

カフェが議論の場となり得た理由、それにはカフェというものの構造が大きくものをいっているように思える。

カフェは店の外におかれたテーブルを通して、そのまま通りとつながっていた。そこは店というよりもむしろ、広場といった方がふさわしいところであったかも知れない。その空間を多くの人間がただ通り過ぎるし、建物の中であっても、見知らぬ人間が何の断りもなく入ってくる。そこは絶えず他者から刺激を受ける環境であり、しかもくどいようだが、他のシチュエーションでは全く会話のチャンスがない他者同士が集い得るところでもあったのだ。

◆アゴラゼイン◆

このような開放された空間は洋の東西を問わずみられ、そこから様々なものが生まれていった。古代ギリシアではその空間が広場(アゴラ)であり、昔の日本では道そのものが私空間である家屋と連続していた(道に面した壁がなかった)。



そもそも広場の原型であるアゴラは場所とは無関係にただの「集合」を指していたという。アゴラには商店・神殿・会議場などが建ち並んでいたが、そこで行われた諸行為は全て「アゴラゼイン」の一言で言い表されていた。場所はあっても、その間は通りによって連続していたのだ。

カフェも店という場所で区切られてはいても、このような風通しの良さを持ち合わせていた。場を共有しているという連帯感と、場の開放性から来る刺激がカフェに議論をもたらしたのだろう。

◆まとめ◆

企画をたてた当初は、「たまり場の総合科学」を目指していたのだが結局は「たまり場と総合科学」までしか到達できなかった。興味のある方は是非、研究された上、内容をご報告下さい。

参考文献

- ・カフェハウスの文化史 ヴォルフガング・ユンガー著
小川 悟訳 1991年 関西大学出版部
- ・橋本 敏子 銭湯に関する一考察 生活学 第4冊
日本生活学会編 1978年 ドメス出版